

琉球大学学術リポジトリ

コメニウスの道德教育論

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/12629

コメニウスの道徳教育論

Moral Education in J.A.Comenius

藤原 幸男

Yukio FUJIWARA

はじめに

コメニウス（J.A. Comenius 1592～1670）は17世紀の時代精神を旺盛に吸収し、それを感覚主義・事物主義・汎知主義のもとに集大成し、自分の教育思想を展開した。「この時代（—17世紀、藤原）までの教授論をコメニウスはそのほとんどを批判的に吸収しながら自分の思想を展開させて」いるし、「その足跡も当時の学問の中心地までも及んでいますから、他の教授論はコメニウスにおいて大成され、そこから新たに流れ出る形になっているといえる⁽¹⁾」のである。

コメニウスの道徳教育論にあっても、中世の伝統的な道徳観を引き継いでいるが、そのなかに新しい道徳の芽ばえを含みこんでいる。その芽ばえは、一方では、彼の出身地ボヘミアにおける同胞教団の教義とそれにもとづく人々の生活に起因する。他方では、当時の時代精神を多感に吸収し、祖国解放・人類平和を求めて展開されたコメニウスの学問的思索に起因する。また、道徳教育の方法についても、行動（経験）を重視しており、説教を中心とした当時のそれと照らし合わせると革新的であるといえる。

本稿では、主著『大教授学』（1632—38執筆、1657出版）を中心にして、コメニウスの道徳教育論を論述していくことにしたい。

1. 事物と自分自身の支配としての徳行（徳性）

コメニウスによれば、神は人間を神の似姿として、「神自身の像にかたちどって、つまり精神を与えられたものとして」制作した⁽²⁾。そこから、人間は次の三つの性質をもつことになる。⁽³⁾（『大教授学』第4章）

I 理性をそなえた被造者

II 被造物の支配者である被造者

III 自分の創造主の似姿であり、よろこびである被造者

Iの、理性をそなえた被造者とは、あらゆるものの探究者、命名者、解明者であり、世界にあるあらゆるものを知り、その名前をあげることができ、理解することができる、ということである。いかえれば、それは学識ということになる。IIIの、自分の創造主の似姿である被造者とは、神の完全さを生き生きと形に表すことであり、そこから、神に帰依する心、あるいは敬神が要求される。

IIの、被造物の支配者である被造者という性質から、本稿で取り上げる徳性が生じてくる。コメニウスの説くところによれば、被造物の支配者であるということは二つのことを含む。一つには、事物の支配者である。あらゆるものをその本来の目的に向けることによって、これを自分の便宜物に変えて利用し、君臨することである。二つには、自分自身の支配者である。つまり、自分の肉体的欲求にとらわれないで自分自身を制御し、隣人の心に従うことであり、自分と他人との・内面と外面とにわたる行動と行為との手綱をじょうずにとることができる、ということである。こうして、さまざまな事物と自分自身とを支配する者となることが要求され、そこから、徳性（VIRTUS）あるいは尊敬に値する徳行（MORES）⁽⁴⁾が要求されてくる。

ここでの徳行は、うわべだけのものではなく、さまざまな行動が、内面でも外面でもすべて釣り合いが取れていることが必要とされる。これについては、次にあげるコメニウスの調和観とも深く関わってくる。

こうして、人間存在の本質規定から、学識・徳行（徳性）・敬神の三者が

要求されてくる。

2. 徳行（徳性）の調和

コメニウスは三者の要求に対応して、人間の目的として、事物を認識する目的、徳行の調和をえる目的、神を愛する目的、の三つをあげる⁽⁵⁾。これ以外の物（健康・体力・容貌・権力・地位・交友・幸運な成功・長寿）は付録であり、装飾品にすぎないとする。三つの目的こそ根幹だというのである。ここで、人間の目的において、事物の認識、神への愛とならんで、徳行に関しては調和ということの問題にしていることに注意したい。⁽⁶⁾（『大教授学』第5章）

コメニウスは、徳性の種子が人間に生まれついている根拠を、調和からみちびきだす。一つには、人間はすべて調和をよろこぶことからであり、二つには、人間自身がその内部も外部も調和以外の何物でもないこと⁽⁷⁾からである。

人間はすべて調和をよろこぶことに関して、コメニウスは音声の調和、料理におけるいろいろな味の・じょうずな取り合わせなどを事例としてあげ、人はだれでも、ほどほどの温かさ、ほどほどの冷たさ、五体の静止と運動との・ほどのよさを楽しむものだ、としている。

人間自身がその内部も外部も調和以外の何物でもないことに関して、コメニウスは、時計の例をひいて、肉体の運動の調和をあげている。魂の運動に関して、次のように述べている。

「魂の運動の場合、親歯車は意志です。親歯車を動かす錘りは欲望と感情で、これが意志をここかしこに向けるのです。運動を制止し抑制する歯止めは、理性です。理性は、何をどこでどれほどまで実行しなくてはいけないかを、計算し決定するものです。魂の・その他の運動は、親歯車について行く・いわば子歯車です。このことから、欲望や感情に錘りがかかりすぎなければ、つまり歯止めの理性がじょうずに錘りを制止すれば、さまざまな徳性の調和と和音が生じないではないことになるのです。徳性の調和とはつまり、能動と受動がうまくほどをえていること⁽⁸⁾であります。」

ここでは、歯車との類比において魂の運動メカニズムを説明している。親歯車、親歯車を動かす錘り、運動を静止し抑制する歯止めに対応させて、意志、理性、欲望・感情をあげている。魂の運動にあっては理性と欲望・感情の両者のほどよい調和がポイントであり、そのほどよい調和が徳性の調和ということになる。

ただ、徳性の種子は調和という形で私たちのなかに自然が与えているけれども、徳性そのものまでを与えているわけではない。徳性そのものは学習（教育）によって獲得されるのであり、徳性の調和を形成することが道徳教育においてめざされることになる。

3. 学識と徳行の結合

(1) 徳行と敬神に移り行く学識の追求

コメニウスによれば、さきにあげた学識・徳行（徳性）・敬神の三者はけっして完全に分離されたものではなく、どれ一つとして離れられないように密接に結びついている。

「神に隣人に私たち自身に仕えたければ、必ず神にたいしては敬神の心を抱き、隣人にたいしては徳を行ない、自分自身に対しては知識をそなえなければなりません。ところが、これらは皆互いに結びついているのであります。その証拠には、自分だけについてみてもたんに賢いばかりでなくまた高い品性もそなえ敬けんでもなければなりませんし、隣人の役に立つ場合でも徳行によるだけでなく知識と敬神の心とによらなければならず、また神への賛美にしてもただ敬神の心からだけではなく知識と徳行とから生まれたものでなければならぬのであります。」（『大教授学』第10章⁽⁹⁾）

こうして学識・徳行（徳性）・敬神の三者の結合が問題になる。だが、学識がそのまま徳行（徳性）と結びつくとはかぎらない。ともすれば相反することにもなりかねない。そこで、両者を意識的に結びつけることが必要になるのである。コメニウスは諺や箴言を引いて次のように述べる。

「この三者が鋼鉄の帯で結び合わされない限り、必ず分離のわざわいが出てきます。徳行と敬神とに移り行かぬ学識は、わざわいなるかな。いったい、徳行を伴わぬ学問が何になるでしょう。学問において進み徳行において退く者は（と古い諺は申しております）、進むよりはむしろ退く、と。ですから、ソロモンが、容姿は端麗でも知性に背を向けた女性について申したことは、学問はあるが品性の下劣な人物についてそのままあてはまるのです。学識の背徳の人にあるは、黄金の首飾りの豚の鼻先にあるに似る（箴言 第十一章第二十二句）。また、宝石が、鉛の台にではなく、黄金の台にはめられてこそ、二つながらいっそうの輝きを放つに似て、知識は、不道德と結びつくべきものではなく、まさに徳性と結びつくものでありますし、またそれでこそ互いに美しさを高め合うものでもあります。しかしながら、この両者に本当の・敬神の心が加わった時に初めて人間の完成は成就するでありましょ⁽¹⁰⁾う。」

のちにヘルバルトが訓育に結びつく教授として「訓育的教授」を提唱したが、ここには、それに近い考え方がみられる。⁽¹¹⁾徳行（徳性）に結びつくような知識こそが求められているのであり、それを可能にするような教授が課題となってくるのである。

(2) 徳性についての学識の追求

コメニウスにあっては、知識と徳行（徳性）の結合という考えは、徳行（徳性）に結びつくような知識を要請するだけではなく、徳行（徳性）についての認識をも要求してくる。

コメニウスは「言語の教授方法」に関わって、「事物を表す単語はばらばらに学んではいけない」と述べる。その理由として、「そもそも事物が、ばらばらでは存在もしなければ認識されもしない」からであるとしている（『大教授学』第22章）。⁽¹²⁾こうして個々の事物を諸事物の脈絡のなかで認識することが課題となる。

この観点からすれば、鈴木琇雄がいうように、『大教授学』第1～4章と

はちがって、学識は「『徳性』についての『知識』『学識』、そしてまた、『敬神の心』についての『知識』『学識』をも包むところへ、意味を拡大されていくことになる。「徳性と敬神の心とが、なにゆえに、人間の本質を形づくるものであり、なにゆえに、人間がそれに生きなくてはならないのか、その根拠を〈認識〉すること、また、そもそも、徳性とは、そして、神とは、なにであり、また、敬神とは、なにであるのか、それを〈認識〉することもまた、徳性、敬神の心とをはぐくむ上に欠くことが、できない」のであり、「学識」は、「『徳性』についての『知識』『学識』、そしてまた、『敬神の心』についての『知識』『学識』をも包むところへ、意味を拡大されてもいくのである。⁽¹³⁾

徳性についての知識・学識は彼の構想した汎知学体系から生まれ、汎知学的作品（教科書）のなかに具体化されている。たとえば『大教授学』以前に構想され執筆された『全事物界の劇場』（1614—27執筆）では、〈自然物の世界〉とならんで、〈人間の・さまざまな営みの世界〉も、〈神の世界〉も、すべて〈事物界〉とされ、それについての「学識」が「汎知」として教授・学習されなくてはならないことになる。

この考えは、『大教授学』の前身であるチェッコ語『教授学』（1628—32執筆）とほぼ同時に書かれた『開かれた言語の扉』（1629—31執筆）にも踏襲される。コメニウスの『大教授学』での記述によれば、事物の脈絡のなかでの事物認識という考えが、「自然界」「技術界」「人間界」「教育・学問界」「宗教界」という形で事物の構造を表している「私の・言語の扉を制作する機縁にな」ったという。⁽¹⁴⁾

4. 徳性の内容

(1) 伝統的徳とコメニウス

コメニウスは『大教授学』第23章において徳行の教授方法を述べている。そこでまず、なによりもまず植えつけないといけないのは、四つの主徳だ

としている。四つの主徳というのは、思慮深さ、ほどのよさ、たくましさ、正義の心である。

これら自体はそう珍しいものではない。というのもこれらは、プラトンにまでさかのぼる伝統的な見解に合致しているからである。つまり、それによれば、「狭義の倫理徳 *virtus moralis* のうち賢明、節制、剛毅、正義の四つは人間の全倫理的態度に対して基礎的な意味をもち、また諸他の徳に卓越した地位を占めているので枢要徳 *virtus cardinals* と称される⁽¹⁵⁾」のであり、コメニウスのあげた四つの主徳と一致する。そうだとすると、さほど目新しいものではないということにもなる。

だが、東ドイツのコメニウス研究の第一人者 R. アルトは、それにもかかわらず、「一般に、中世においても既に要求されていたような諸徳に遭遇するとしても、ここでは社会生活の変化とか教会の無制約的権威からの離反とか、民主的な大衆運動の諸傾向などを反映した新しい要素が浸透している」とし、「決して許さるべきでないといわれる行動様式の中に、例えば他人への蔑視とか軽蔑とかも考えられる⁽¹⁶⁾」と述べている。

ここにおいて、伝統的とみられている主徳、および他の徳を、コメニウスの生活基盤とつなげて見直すことが必要になってくるのである。

(2) コメニウスの徳論とボヘミア同胞教団

コメニウスは、よく知られているように、ボヘミア同胞教団の総督であり、それを足場として祖国ボヘミアの解放を生涯を通じて追求していった人物である。だとすると、ボヘミア同胞教団にみられる道徳意識を検討してみる必要がある。

ボヘミア同胞教団は、三十年戦争の時代に、コメニウスが主導者をしていったプロテスタントの敬虔な信者の団体であり、原始キリスト教の精神にもとづいて、団員が平和・平等・勤勉・節制などを目標に掲げた、汎神論的立場に立つ、信徒の集まりであった。ここにみられるように、ボヘミア同胞教団

は平和・平等・勤勉・節制などといった、当時にとっては革新的な道德意識を共有していた。それは一方では、初期資本主義・市民社会につながる道德意識であり、他方では、コメニウスが悲願とした祖国解放・世界平和につながる道德意識でもあった。形としては旧来の徳と変わらないようにみえても、この二点において性格が一変してしまうのである。

だが、『大教授学』の段階では、「教授方法」を主要に問題にしているせいか、コメニウスの考えた徳の革新性はまだ具体的な姿として現れていない。それらが明瞭な姿を現すのは、後期の汎知学的作品（教科書）においてである。

(3) 『演劇による学校』における徳論

たとえばそのような徳（倫理）のとらえ方は、『演劇による学校（Schola Ludus）』（1653—54執筆、1656出版）にでてくる。これはラテン語学校の生徒用教科書として書かれたもので、登場人物の対話の形で、つまり劇をとおして事物界を示したものである。その序文によれば、『開かれた言語の扉（Janua Linguarum reserata）』（1629—31執筆、1631出版）をドラマ化したものだとされている。『演劇による学校』においてコメニウスは新しい社会を Republica と名づけ、それを、古い王国が、戦争による財政破綻と、官僚の腐敗、権力の私的行使によって没落・崩壊したあとに来る社会として位置づけた。それは、有産階級と無産階級から選出された12人の代議員からなる参事会による立法・行政機関をもち、経済的独占を禁止し、法による支配を前提とする社会であった。この新社会の目的は、「人民が確実に、優美に、ふさわしい生活をいとなむこと」にあり、その実現のために、新しい法による支配を原理とする制度が樹立されることとなった。⁽¹⁷⁾

この新しい市民社会と関連して、コメニウスは、徳を、人間の健康・職業と結びつけて把握し、論じている。人間の精神の健康は、肉体の健康に「根をおいている」ものであり、後者の健康が認識の完全性・確実性を保障する。

この見解は、さらに、人間の共通の福祉を樹立する労働の主体的把握・社会における職業の倫理と結びついていく。「職業がなければ、だれも自由になりえない」という命題に凝縮されたその原理は、「みずからできることは、すべて自分でおこない、他人の助力を当てにしなければならない」という周知の格言に新しい意味内容をもりこんだのであった。⁽¹⁸⁾「職業をもって個人が自由に生きることができ、それが可能であり、社会的生産に参加することが善となる新しい倫理を把握していた⁽¹⁹⁾」と考えられるのである。

また「正義」は、商品交換・富の配分と結びつけて論じられ、⁽²⁰⁾「自己愛」をもって「人間の自然性である」とこれを肯定し、それと矛盾することなく、人類の福祉と幸福へ向けて組織化する「中庸」等々に明らかなように、彼の徳は、内面の問題にとどまらず、それを外化することに意味があったのである。すなわち、徳は、人類の物質的・精神的福祉の増進という目的を明確化し、その目的に向けた認識と相補的関連をもっていたのである。⁽²¹⁾

(4) 『世界図絵』における徳論

後期の著作で、絵入りの本として知られる『世界図絵 (Orbis sensualium pictus)』(1653—54執筆、1658出版)では、徳性に関する項目として、「英知」、「勤勉」、「節制」、「勇氣」、「忍耐」、「人間性」、「正義」、「寛大」が取り上げられているが、そこには、⁽²²⁾さきにあげた、初期資本主義・市民社会につながる道德意識、祖国解放・世界平和につながる道德意識がみられる。

まず、初期資本主義・市民社会につながる道德意識についてみていこう。「勤勉」の項目では、「勤勉は労働を愛し、怠けることを避け、常にありのように働いています」とあり、「労働」と結びつけてとらえられている。

「正義」の項目では、「契約する際には誠実にとりかわし、協定と約束を守らせませす。／預けられたものや貸し出されたものを元に戻させませす。／それぞれの人が所有しているものを誰にも盗んだり傷つけたりさせませせん。／こ

れらが正義の規則なのです。」と述べていて、「正義」は「契約」「約束の実行」「所有」の問題としてとらえられている。

「寛大」の項目では、「寛大は、乏しいものに施すことができるように、誠実に手に入れた豊かさをほどよく保っています。……／富を支配していますが、自分のものというわけではありません。／持てるだけ持とうとする貧欲漢と同様で、財産の所有者ではなく、番をするものなのです。」と述べていて、「寛大」は「富」の問題として、「富」への関わり方の問題としてとらえている。

このような記述から、コメニウスは中世的な枠組みにとどまらず、初期資本主義につながるような禁欲主義とむすびつけてこれらの徳（倫理）をとらえていることが読み取れるであろう。

次に、祖国解放・世界平和につながる道徳意識についてみていくと、「忍耐」の項目で、「忍耐は不幸と不正に対して小羊のように恭順で、あたかも父たる神のこらしめのように耐え忍びます。／その間に（波立つ海での船のように）希望といういかりに寄りかかり、涙を流して神に祈り、悪に耐え善を期待しつつ、雨雲のあとの太陽を待ち望みます。」と述べている。ここには「希望のいかりに寄りかかり……善を期待しつつ」にみられるように、単に堪え忍ぶことを求めるのではなく、希望・善と結びつけて忍耐をとらえるという画期的な見方が提起されている。これは、コメニウスが長年の平和運動のなかで到達した「忍耐」の見地だといえよう。⁽²³⁾

5. 徳行の教授方法

(1) 主徳の教授方法

コメニウスは『大教授学』第23章において、徳行をつちかう技術として16の主要法則をあげている。第一と第二では、一切の徳性を一つの例外もなく植えつけなければならぬとして、オールラウンドの教育の必要を説きつつ、主徳と呼ばれている基本徳性、つまり先にあげた思慮深さ、ほどのよさ（中

庸)、たくましさ、正義の心の四つの育成が基礎だとしている。そして第三から第六で、主徳のそれぞれの教授方法について述べている。⁽²⁴⁾

まず思慮深さは、事物の本質と価値にしたがって事物を区分することを学ぶような教授によって養われるとする。なぜなら、事物についての本当の(正しい)価値判断が、あらゆる徳性の基礎だからである。ここに、正しい事物認識から思慮深さが生じることが指摘されている。このことは、理性と徳性の結合の原則を示しているといえる。

次に、ほどのよさは、教育の全期間にわたり、飲食の摂取、就寝と起床、労働と遊戯、会話と沈黙とを通じて教えること、および、これを通じて守る習慣をつけさせることが望ましい、としている。ここには、ほどのよさは、全生活のなかで教えること、生活規律・リズムを形成することのなかで養われること、労働と遊戯のけじめ、会話と沈黙のけじめのなかで養われることが指摘されている、とみることができる。

心身のたくましさは、克己を通じて学んでほしい、つまり駆けまわったり時間以外や時間以上に遊びまわるわがままを抑え、短気、不平、立腹を制することによって学んでほしい、とする。そして、これの基礎は、つまり、すべて理性にもとづいて行動し、感情や衝動に駆られた行動は何一つしない習慣を青少年につけさせる、ということだ、と述べている。ここでは理性による感情的・衝動的行動の制御が説かれている。つまり、理性と徳行の結合の原則が述べられている、とみることができる。

正義の心は、何人をも傷つけぬことにより、すべての人にその持分を認めることにより、偽りと欺きとを避けることにより、進んで人々に奉仕する者であり人々に愛される者であることを示すことによって学ばれる、とされる。ここでは、対人関係において正義の行動(相手の持分を認める、偽り・欺きをしない)をすることによって正義の心は学ばれる、というのである。ここに行動による心(徳性)の形成という観点が貫かれている。

(2) 「品のよい大胆さ」「労働による忍耐力」「他人へ奉仕する心」の教授方法

第七から第十にかけては、心身のたくましさと同類の徳について説明し、その教授方法を述べている。⁽²⁵⁾

第七としてコメニウスは、第三の主徳としてあげたたくましさに類する徳として、「品のよい大胆さ」と「労働による忍耐力」とをあげ、交際と労働経験の重要性を説く。「子どもには、憶せず人々と交際し、恥ずかしくない労働ならばなんでもやるように教えておかななくてはならない」「これは世間ざらい人間ざらいになったり、無為徒食の人間となって大地の厄介にならないようにするためだ」というのである。

第八は、重ねて「品のよい大胆さ」について述べる。これは、「品位のある人々と交際を重ねることにより、また、指図されたことを人々の前でやりとげることによって培われる」という。

第九は、重ねて「労働による忍耐力」について述べる。「若い人々は、真剣な仕事にせよ、楽しみにする仕事にせよ、常になにかしら労働していれば、労働に耐える気力が培われる」とする。「労働していればよい」「気高い魂を養うものは労働である」という。心身のたくましさと同類の徳の形成にあって、交際と労働が強調され、両者が形成方法の根幹をなしていることに注目したい。

第十では、正義と同類の徳性として「他人へ奉仕する心」をあげ、その形成方法を述べる。コメニウスによれば、破滅した人間性には利己心がつきまとっている。自分の利益ばかりを求め、社会の幸福を考えるのを後回しにしている。このことからすれば、「できるだけ数多くの人々に奉仕することによって役に立つ人間になろうと心から願い、またそのように努力する習慣をつけてほしい」とする。「すべての人間が、共同の利益のために力を合わせ、必ずいつも助け合うことを知り望みもするときに初めて、個々人の状態も社会の状態も幸福になったといえる」としている。その基礎になるのが、他人へ奉仕する心であり、そのことの教育であるとしている。

ここでは、他人への奉仕をあげているが、それは中世的な服従心の形成・訓練にとどまらない。それを越えて、共同利益・人類社会のための助け合いを実現するための基礎としてコメニウスが位置づけている点に注目したい。

(3) 徳性（徳行）の一般的教授方法

第十一から第十六は、これまであげた徳性（徳行）の一般的な教授方法について、⁽²⁶⁾ 概括的に述べている。

第十一：徳性の形成は、魂が罪の誘惑を受けぬうちに、柔らかな年頃から始めてほしい。

第十二：徳性は、たゆまず徳を行うことによって学ばれる。

第十三：両親・乳母・教師・同僚生徒の・きちんとした生活の実例が、たえず道を照らしてほしい。

第十四：しかし、実例に、公式つまり生活の規則をつけ加えなくてはならない。

第十五：もっとも力を入れなければならないのは、子どもたちを、腐敗した人々から守り、これに毒されぬようにすることである。

第十六：どのような悪も忍び込まぬように見張っていることは、不可能であり、したがって悪行に抵抗するためにまさに規律が必要になる。

こうしてコメニウスの道徳教育論にあっては、徳は、一方では、事物の正しい価値判断を教授によって学ぶことから形成され、他方では、説教ではなく、行動そのものの実践をつうじて、とりわけ全生活をとおして形成されるべきものであることを強調している点に注目する必要がある。特に後者が大きく強調されていることは、そのユニークな特徴である。⁽²⁷⁾ なかでも労働の経験、友情の経験、奉仕の経験が強調されているが、労働の経験、友情の経験、奉仕の経験の強調には、ボヘミア同胞教団やコメニウス自身の育った生活環境が反映されていると考えられる。

もっともコメニウスは説教を全く否定しているのではない。「第十四：し

かし、事例、公式つまり生活の規則をつけ加えなくてはならない」にみるように、生活の実例に付加する形で、公式（生活の規則）の説教を認めている。そこでいう公式（生活の規則）とは、「嫉妬は、なぜ、またどのようにして、慎まなければならないか。苦惱その他の・あらゆる人間的不幸から心を守る武器は、なんであるか。よろこびの気持ちをほどほどに押さえるには、どうすればよいか。どんな方法で怒りをしずめればよいか。」等についてであり、それは聖書や賢人の言葉から集めることになる、とコメニウスは述べている。とはいうものの、この公式（生活の規則）の説教が徳育の中心になるのではない。それはいうまでもなく、「事例をまねする場合の過ちを正し、不足を補い、手をかしてやるためのもの」にすぎないのであって、中心となるのは、さきにあげた行動（実生活）をつうじての徳の形成なのである。このことはコメニウスの先進性を示すものであろう。

注

- (1) 堀内守「近代における教授論の成立」、『高校生活指導』第2号、1971年、92ページ。
- (2) コメニウス（鈴木秀勇訳）『大教授学1』明治図書、1962年、58ページ。
- (3) 同上、61ページ。
- (4) A・フリットナー編のドイツ語版（Herausgegeben von Andreas Flitner, Comenius : Große Didaktik, Klett-Cotta）では、VIRTUS が Tugend に、MORES が Sittlichkeit になっている。ラテン語から訳出したとされる鈴木秀勇訳では、前者が徳性で、後者が徳行と訳されている。本稿では鈴木訳に従っておく。
- (5) コメニウス（鈴木秀勇訳）『大教授学1』、67ページ。
- (6) コメニウスの調和観については、Juri Benes : Zum Begriff der Harmonie bei Wolfgang Ratke und Jan Amos Komensky. In : Jahrbuch für Erziehung- und Schulgeschichte, 27, 1987. を参照。

- (7) コメニウス(鈴木秀勇訳)『大教授学1』、74~75ページ。
- (8) 同上、76ページ。
- (9) 同上、106~107ページ。
- (10) 同上、109ページ。
- (11) 江藤恭二によれば、ドルナウ(1577~1632)がすでに「人間性の高みにまで教授すること」を提唱している。コメニウスはこのドルナウの見解に学び、積極的に取り入れたのかもしれない。江藤恭二『ドイツの心』講談社現代新書、1980年、135~139ページ。および江藤恭二『西洋教育史叙説』福村出版、1969年、110~112ページ。
- (12) コメニウス(鈴木秀勇訳)『大教授学2』、明治図書、1962年、31ページ。
- (13) 鈴木○雄『コメニウス「大教授学」入門・下』明治図書、1982年、125~126ページ。
- (14) コメニウス(鈴木秀勇訳)『大教授学2』、31ページ。
- (15) 『哲学事典』平凡社、1971年、1017ページ。
- (16) R・アルト(江藤恭二訳)『コメニウスの教育学』明治図書、1959年、103~104ページ。
- (17) Schola Ludus, Pars III, Actus II. 堀内守「〈神の三著〉性とコメニウス教育学の方法的発展」、『教育哲学研究』8号、1963年6月、41ページより。
- (18) Schola Ludus, Pars VI, Actus II. 堀内守「コメニウス教育学の方法研究の前提」、『教育学研究』30巻4号、1963年12月、27ページより。
- (19) 堀内守「〈神の三著〉性とコメニウス教育学の方法的発展」、41ページ。
- (20) Schola Ludus, Pars VI, Actus II. 「コメニウス教育学の方法研究の前提」、27ページより。
- (21) 堀内守「コメニウス教育学の方法研究の前提」、27ページ。
- (22) コメニウス(井ノ口淳三訳)『世界図絵』ミネルヴェ書房、1988年。以下同様。
- (23) 「忍耐」については、岡本英明「教育課題としての『がまん』」、『児童心理』1988年6月号を参照。そこで岡本は、「『がまん』は、その魂の最内奥において揺る

コメニウスの道徳教育論（藤原）

ぎない人間においてのみ可能である。というのも、こうした人間は、子どもへの信頼に満ちた関係によって支えられ、また究極的には、上述したコメニウスも明白に述べているように、世界と生への深い信頼と未来への希望によって支えられていることを感じるからである。」（同論文、17ページ）と述べている。

(24) コメニウス（鈴木秀勇訳）『大教授学2』、41～43ページ。なお一部分は、フリットナーのドイツ語版に照らして訳語を変えた。

(25) 同上、43～45ページ。

(26) 同上、45～48ページ。

(27) 梅根悟「市民革命期の道徳教育思想」、『世界教育史大系38、道徳教育史』講談社、1976年、64～65ページ。梅根は「道徳教育論におけるこうした経験主義的傾向や体罰否定の傾向はのちの、ロック以後の思想家にも連なるものである」と述べている。